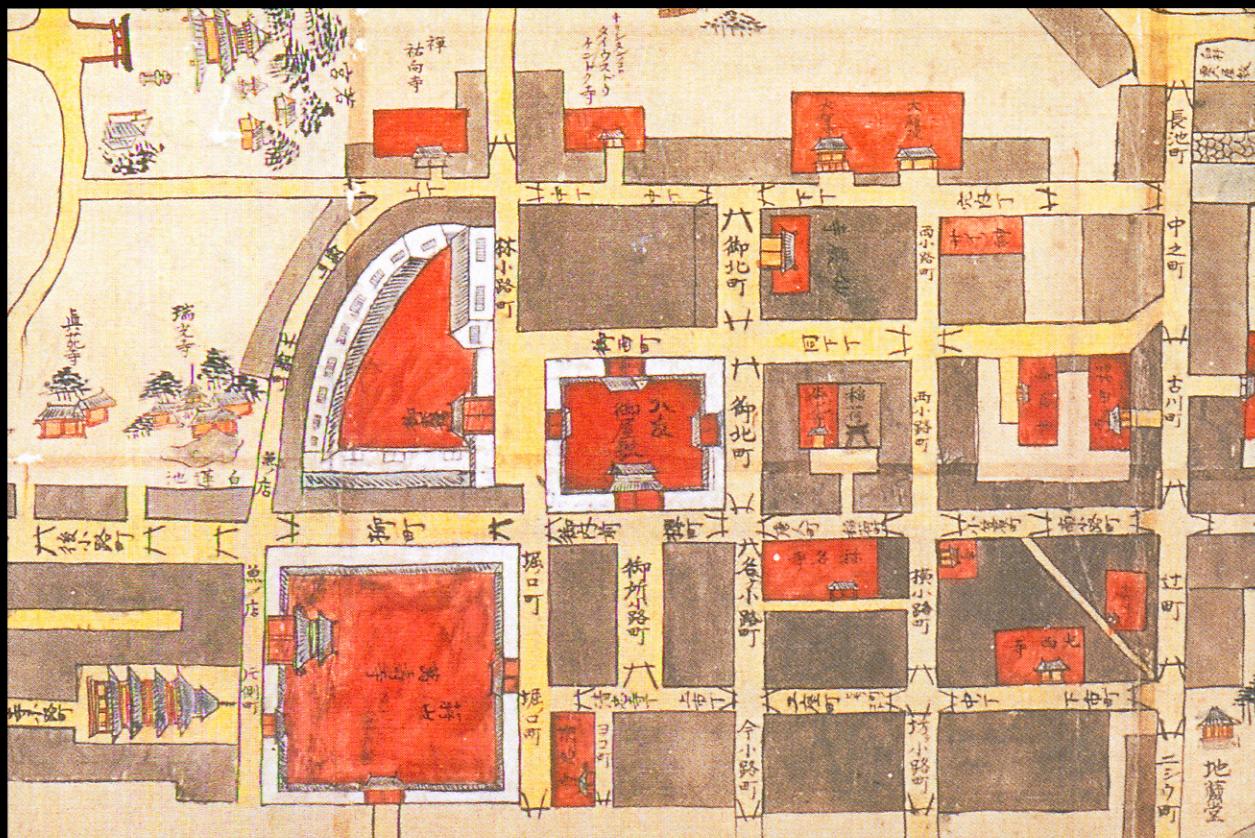


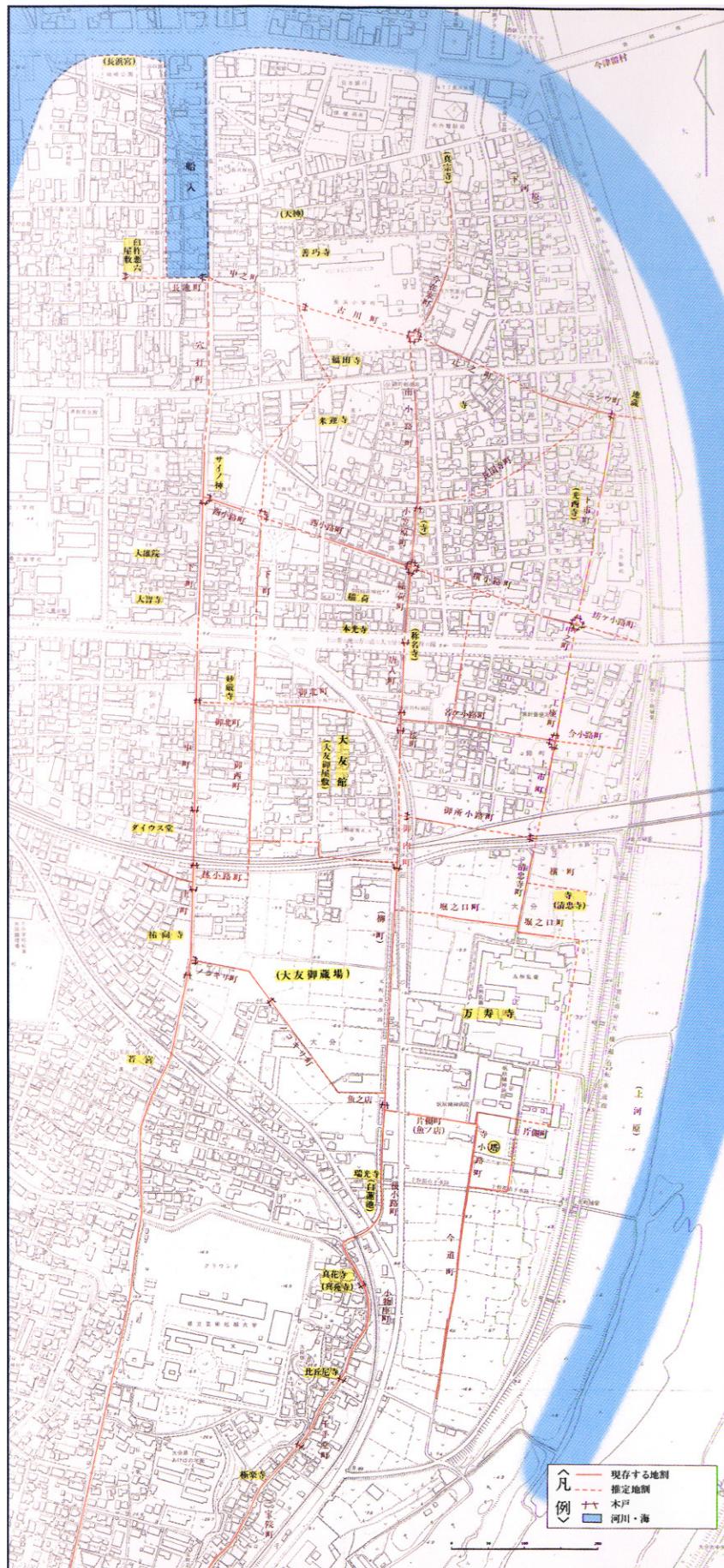
大友館跡

— 発掘調査概報 I —



2000

大分市教育委員会



第1図 戦国時代の府内復原想定図

序 文

本書は、大分市教育委員会が平成10年度及び11年度に行いました大友館の確認調査について、その概要を収録したものです。周知のように、大分市は豊後守護そして戦国大名として著名な大友氏の本拠であった「府内」の遺跡を擁しております。大友氏22代宗麟（義鎮）の時代には、当時全国有数の都市として発展し、キリスト教宣教師たちによってヨーロッパにも紹介されています。この府内にあった大友氏の館については、これまで「府内古図」と呼ばれる絵図により、府内の中心付近に存在したと推定されていましたが、都市化の進んでいる現在の景観からはその痕跡を全く窺い知ることができませんでした。ところが、平成11年度に第1次、第2次調査として実施した発掘調査の結果、広大な庭園跡や巨大な土壘跡が検出されるなど、注目すべき発見が相次ぎ、大友館の存在が確認されるとともにその実像の一端に初めて光を当てることができました。この調査成果に基づき、大分市教育委員会では大友館の歴史的な重要性に鑑みて、遺跡保存及び国史跡指定に向けてのとりくみを平成11年度より開始することとなり、国庫による補助も受けて遺跡確認調査を引き続き実施しています。今年度の調査でも、第1次調査で検出された庭園遺構の広がりが把握されるなど新しい諸知見を得ることができました。

このような貴重な成果を得られましたのも事業者及び地権関係者各位の埋蔵文化財に対するご理解とご協力の賜です。また、調査にあたってご指導いただきました諸先生方には厚くお礼申し上げる次第です。本書が広く文化財の保護、考古学・歴史学をはじめとする学術研究、さらには教育文化の向上に役立つことを願うものです。

平成12年3月31日

大分市教育委員会

教育長 清瀬和弘

例　　言

- 1 本書は平成10年と11年度にかけて大分市教育委員会が実施した推定大友館跡における埋蔵文化財確認調査の概要報告書である。
- 2 発掘調査の費用は、国と県から補助金を受けて、大分市が負担した。
- 3 調査および本書の執筆・編集は秦 政博、池邊千太郎、高畠 豊、河野史郎、塙地潤一が担当した。
なお、執筆者名は各担当部分の文末に記した。
また、出土遺物の整理については飛高裕子（大分市教育委員会生涯学習課文化財室臨時職員）が行った。
- 4 遺構の写真撮影は空中写真を九州航空株式会社に委託し、個別の遺構ならびに出土遺構の写真は各担当が行った。
- 5 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N.）である。
- 6 出土遺物、記録資料は大分市文化財資料室（大分市荷揚町4-36）に収蔵、保管している。

◆ 目 次

第1章 はじめに.....	1
1 調査に至る経過.....	1
2 調査組織.....	1
第2章 歴史的環境.....	2
1 府中の成立.....	2
2 戦国期の府中（府内）町の構造.....	3
第3章 調査の概要.....	5
1 推定大友館跡の東南地区.....	5
第1次調査.....	5
第3次調査.....	9
2 推定大友館跡の西側外郭線地区.....	10
第2次調査.....	10
第5次調査.....	14
3 推定大友館跡の中央地区.....	16
第4次調査.....	16
4 町屋の調査.....	23
(1) 中世大友城下町跡1次～3次調査.....	23
(2) 中世大友城下町跡4次調査.....	23
第4章 まとめ.....	25

報 告 書 抄 錄

ふりがな	おおともやかたあと
書名	大友館跡
副書名	発掘調査概報 I
巻次	一
シリーズ名	一
シリーズ番号	一
編著者	秦政博、池邊千太郎、高畠 豊、河野 史郎、塙地 潤一
編集機関	大分市教育委員会
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL(097)534-6111
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおともやかたあと 大友館跡第1次	大分県大分市 頭徳町	大分市	330051	33° 13' 34"	131° 37' 8"	19980721 ~19990519	2200m ²	区画整理
おおともやかたあと 大友館跡第2次	大分県大分市 頭徳町	大分市	330051	33° 13' 39"	131° 37' 4"	19981104 ~19990430	557m ²	マンション建設
おおともやかたあと 大友館跡第3次	大分県大分市 頭徳町	大分市	330051	33° 13' 39"	131° 37' 6"	19991101 ~20000331	2300m ²	確認調査
おおともやかたあと 大友館跡第4次	大分県大分市 頭徳町	大分市	330051	33° 13' 38"	131° 37' 6"	19991215 ~20000229	100m ²	確認調査
おおともやかたあと 大友館跡第5次	大分県大分市 頭徳町	大分市	330051	33° 13' 38"	131° 37' 4"	20000106 ~20000229	50m ²	確認調査
ちゅうせいおおともじょうかまちあと 中世大友城下町跡第1次	大分県大分市 頭徳町・錦町	大分市	330051	33° 32' 0"	131° 37' 20"	19960507 ~19970402	620m ²	区画整理
ちゅうせいおおともじょうかまちあと 中世大友城下町跡第2次	大分県大分市 頭徳町・錦町	大分市	330051	33° 32' 1"	131° 37' 20"	19970407 ~19970811	200m ²	区画整理
ちゅうせいおおともじょうかまちあと 中世大友城下町跡第3次	大分県大分市 頭徳町・錦町	大分市	330051	33° 32' 0"	131° 37' 22"	19970819 ~19971205	160m ²	区画整理
ちゅうせいおおともじょうかまちあと 中世大友城下町跡第4次	大分県大分市 頭徳町・錦町	大分市	330051	33° 14' 51"	131° 37' 22"	19981101 ~19990331	350m ²	マンション建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大友館跡第1次	包蔵地ほか	中世	庭園遺構 溝、土坑	青花、タイ四耳壺 京都系土師器、タイ鉄絵壺	
大友館跡第2次	包蔵地ほか	中世	土墨跡、井戸跡 盛土整地	ガラス製小杯、鉄砲弾 タイ四耳壺、華南三彩鳥形水注	
大友館跡第3次	包蔵地ほか	中世	庭園遺構、 礎石建物跡	糸切土師器、京都系土師器 華南三彩壺・鳥形水注	庭園遺構の 西端確認
大友館跡第4次	包蔵地ほか	中世	溝状遺構、廃棄土坑 整地層	糸切土師器、京都系土師器	
大友館跡第5次	包蔵地ほか	中世	土墨跡、井戸跡 掘立柱建物跡	糸切土師器、京都系土師器	
中世大友城下町跡第1次	包蔵地ほか	中世	道路遺構 溝・井戸跡・土坑	青花、ベトナム長胴瓶 京都系土師器	
中世大友城下町跡第2次	包蔵地ほか	中世	道路遺構 溝・土坑	青花、華南三彩	
中世大友城下町跡第3次	包蔵地ほか	中世	土坑、井戸跡 大甕埋設遺構	青花、華南三彩、タイ四耳壺 ミャンマー三耳壺、ベトナム長胴瓶	
中世大友城下町跡第4次	包蔵地ほか	中世	火災処理土坑 井戸跡、道路遺構	糸切土師器、京都系土師器 輸入陶磁器	3面の文化面を 確認

第1章 はじめに

1 調査に至る経過

大分市では来るべき21世紀に県都としてふさわしい都市機能の充実を目指し、大分駅の高架化と駅南地区の区画整理事業を基幹とする駅周辺総合整備事業を平成7年度より着手している。この事業対象地区には中世大友城下町跡として周知された大友氏関連の遺跡が存在しており、事業との調整が図られる必要があった。事業はまず区画整理に伴う代替地の整備が先行したため、これに伴う事前調査として記録保存を前提とする埋蔵文化財調査が開始され、平成8年度から9年度にかけて大分市教育委員会により、中世の横小路町比定地での発掘調査（中世大友城下町跡1次～3次調査）が行われている。この調査は、中世大友城下町跡における最初の本格的な発掘調査となった。さらに、大友館比定地の一部も代替地整備地に予定されることになったため、整備に先立って平成8年度に試掘調査を実施した。その結果、建物礎石とも推定された4基の巨石（確認調査により庭園遺構の景石と判明した）が発見されるなど館に関連する可能性のある中世の遺構が検出された。日本史上だけにとどまらず世界史的な広がりさえ有する大友氏とその中心的な遺跡の歴史的重要性に鑑み、市教委では駅周辺総合整備課と協議を行った結果、事業着手に先立って詳細な確認調査を行って事業の可否を判断することとなった。遺構確認調査は平成10年度から11年度始めにかけて市教委により行われたが（大友館跡第1次調査）、その結果巨石を配し池を伴う大規模な庭園遺構が検出され、この地点が館の内部である可能性が極めて高くなかった。これとほぼ並行して館推定地内の西側外郭線付近では民間のマンション建設に伴って市教委により発掘調査が行われ（大友館跡第2次調査）、館に伴うと推定される大規模な土壘遺構や整地遺構が検出された。これらの調査結果により、大分市教育委員会では大友館比定地が実際に大友氏の館跡である可能性が極めて高いと判断し、県教委及び文化庁と協議を重ねた結果、平成11年3月に文化庁により国史跡指定に向けての方向性が打ち出された。以上の方向性に基づき、大分市教育委員会では、平成11年度に第1次・第2次調査で検出された庭園遺構ならびに土壘遺構広がりの確認調査と、調査可能な地点については館内部の構造の確認を目的とした確認調査を行うこととし、第3次～第5次調査として実施した。

2 調査組織

調査指導者 本中 真（文化庁保護部記念物課主任調査官） 坂井 秀弥（文化庁保護部記念物課調査官）

吉良 國光（大分県立芸術文化短期大学教授） 小野 正敏（国立歴史民俗博物館助教授）

前川 要（富山大学助教授） 仲 隆裕（京都芸術短期大学助教授）

調査指導 大分県教育委員会

調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬 和弘

事務局 大分市教育委員会

参事兼文化財担当 秦 政博

生涯学習課 課長 園田 裕彦（平成10年度）、安部 信孝（平成11年度） 主幹 玉永 光洋

文化財室 室長 植木 正巳 次長 讀岐 和夫

主査 福田 誠一 指導主事 藤沢 敏夫、後藤 典幸、甲斐 猛

主任 安部貴美代 主任技師 塔鼻 光司、坪根 伸也、池邊千太郎

技師 高畠 豊、河野 史郎、塩地 潤一

第2章 歴史的環境

1 府中の成立

豊後大友氏の本貫は、相模国足柄上郡大友郷である。初代能直が豊後守護（疑問視する説もあるが）として豊後にかかわりを持って以来、織豊期文禄2年（1593）22代吉統を最後に豊後を去るまでの約400年間、その政治的拠点として機能したのが府中（あるいは府内）である。大友氏の主たる活動の拠点となった府中が、もっとも精彩を濃くするのは、後述のように戦国期一とりわけ16世紀中後期のことである。

府中はもともと豊後国府に淵源する地名と推察される。現在、古国府の名称をもって呼ばれる大分川下流左岸、南大分地区の東端の地は南大分条里の痕跡の残る豊後国府の遺称地である。国府（国衙）遺構は現在までは残念ながら不分明であるが、この地に北接する上野丘の丘陵地は、平安中期（天喜元・康平2）高国府と呼ばれる地であり、国衙施設の置かれた町であった。このことは近年の当該地における埋蔵文化財調査の成果からもうかがわれるところである。もっとも、上野丘陵では白鳳期の百濟系瓦をはじめ、奈良期の創建時の豊後国分寺瓦や版築、あるいは礎石遺構をもった寺院址が発見されており、古代より官衙的施設の置かれた主要な地であったことが判明している。

高国府の呼称がみえる平安中期、ここを最下流左岸にみて流れる大分川は市河の名をもって呼ばれている。その川名から推測するに、この付近の大分川畔ではたぶん「市」の存在（開設）が予想され、市河という名は河川を介して、この地で原初的な商行為が行われていたことからつけられたものと考えても、あながち間違いではなかろう。網野氏が説くように神仏の支配するとされる河原など、特定空間における商活動の展開がおぼろげながらもうかがえるのである。いうまでもなく、それは国衙（官衙）的機能を有した国府（高国府）の地ならではの、歴史的環境条件が作用していることに起因するものにちがいない。

ところで、鎌倉期に入り豊後守護職に任じられた大友氏は以来、中世を通じて豊後支配の役を担い続けたが、その守護所が置かれたのはここ国府の地であった。当初の守護所の具体的な位置は明確ではないものの、南北朝期には上野丘陵の一角（現在の上野大友館跡か）に設けられたとも思われ、そして戦国期には、現顯徳町を中心とした大分川最下流左岸の沖積地にあったことは今次の発掘調査が物語るとおりである。

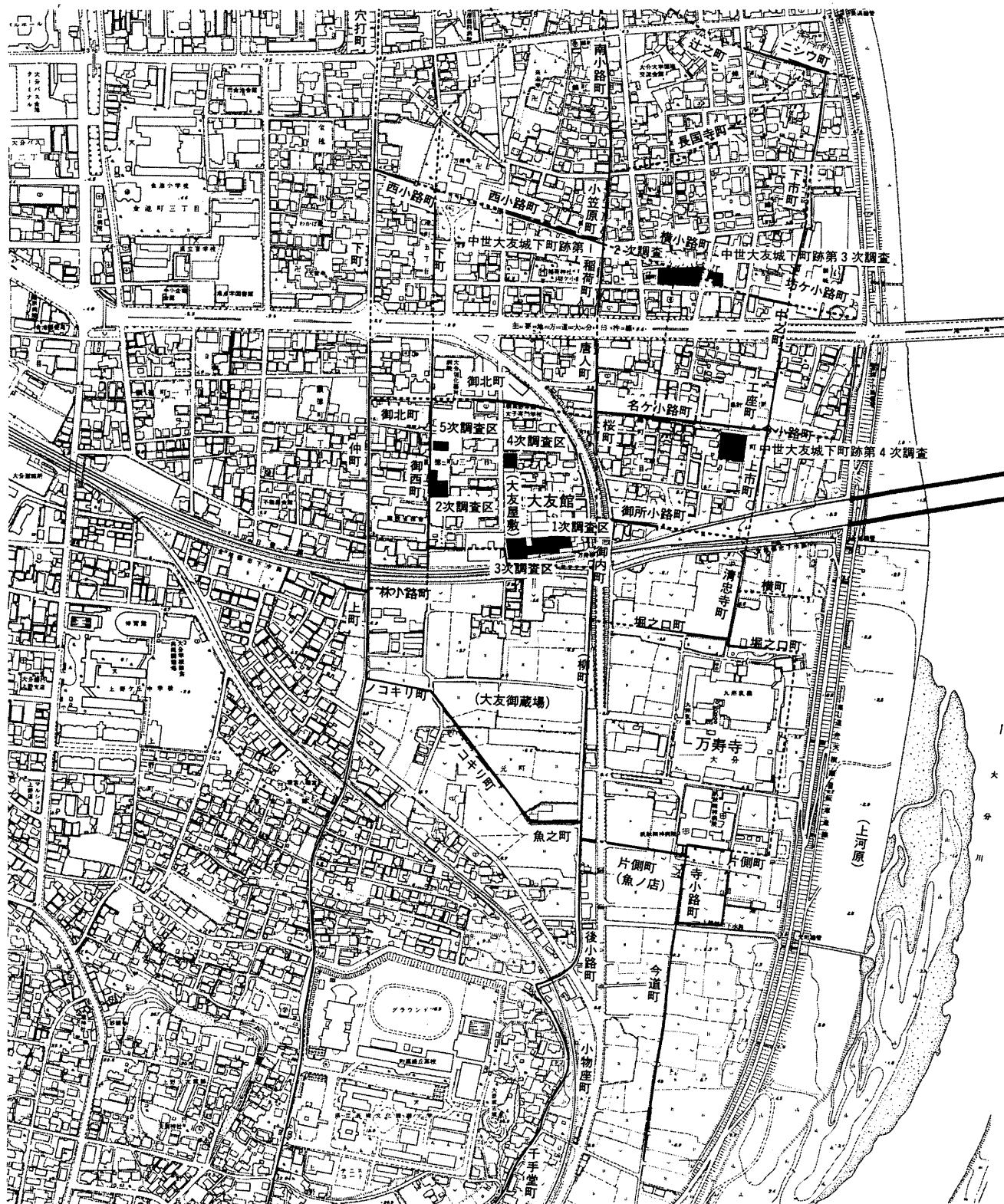
史料上、府中の地名の初見は文暦元年（1234）であり、続く仁治3年（1242）には「新御成敗状」（柞原八幡宮文書）なる史料に、府中にに関する数ヶ条の記述がみられ、この当時、府中はすでに一般化された地名呼称になっていたことが判明する。南北朝期、府中は数度にわたり南朝肥後菊池勢の侵攻を受けるが、それはいうまでもなくこの地が九州北朝の中軸をなした大友氏の本拠地であったことによるためであり、もちろん豊後の政治中心の場として、須要な位置にあったことは、自明の理である。

2 戦国期の府中（府内）町の構造

中世府中（府内）町は大友氏の創始した東九州唯一、最大の商都である。既述のように府中の地名が鎌倉初期にあることから、その初現をすでにこの時期に遡ることができようが、それから戦国期－少なくとも16世紀中期－まで、府中の実像は断片的でしかない文献史料をもってしては充分な把握ができない。

そのような中、戦国期の府中（府内）の姿を伝える数本の絵図が、ほとんど伝説的な仮想性をもって残されていた。その一つは昭和12年刊の『大分市誌』所収の「南蛮貿易時代之府内図」、今一つは市内高山家に伝わる「府内絵図」（「高山家絵図」）であり、また前者と同系列のものは、「大分縣郷土史料集成地誌編」にも採られている。高山家の「府内絵図」（昭和15年写）はもともと旧府内藩が作成していたという絵図が原本となっているものであり、永禄9年（1566）に作成された図をもとに文政12年（1829）に写し取ったものという添書がある。これらにかえてもう1本、市内旧家から近時発見された江戸期の写絵図がある（昭和62年版「大分市史」に所載）。作成の時期からみて、旧形態を最も良く残した絵図であると判断される。絵図には大友館を中心に南北4本、東西5本の道路で区画され、辻には木戸を有した44もの町が描かれ、町の四方には広大な敷地を誇る万寿寺や、ダイウス堂と記されたキリスト教会をはじめとする多くの宗教施設が存在していたことがうかがえる。さらに史料では、「天正16年参宮帳」にみえる府内町の町名（唐人町など八町）とそれぞれの町から伊勢参宮に詣でた町人名が府内町の存在を予想させるものである。

このような絵図や史料を手がかりに、戦国期府内町の実像を探る試みは、前出昭和62年版『大分市史』の編さん時に、とくに最も古い形態を伝える旧家蔵の府内絵図をもとに明治初期の地籍図と照合しながら現市街図への転写作業を行った結果、意外にも絵図にある44の町々や社寺等々が別掲の第1図のように収まつたのである。つまり現在の元町から顕徳町、錦町、長浜町にかけての一帯、大分川最下流左岸の南北2.2キロ、東西0.7キロにわたる広大な範囲に府内町が展開していた様子が図上表現されたのである。（「戦国時代の府内復元想定図」）。南蛮都市とかキリシタンの町とか称される戦国期の府内町が、少なくとも現在のどのあたりにどのような構造をもって存在したのかの想定が、こうしてなされたわけであるが、具体的にその当否を決定づけるものは当時の遺物、遺構の出現を待たざるを得ない状況にあった。方2町の大友御屋敷（大友館）を中心とした倉庫としての御蔵場を南面に置き、これらを取り囲む形で長軸状に区画された町割の実態がわずかに姿をみせだしたのが平成9年の現錦町2丁目（戦国期の横小路町）の発掘調査である。そして、大友館の内部にはぼまちがいないであろうとされる庭園遺構や、館囲りの土塁遺構等の発見（平成10年～11年）をもって、大友館の存在位置をほぼ確定することができた。また、それらの発掘調査地点からの中国、東南アジア伝来の各種陶磁器類や大友氏の戦国大名としての地位を象徴するべく文化度の高い茶道具類などの数々の出土品をもって、少なくとも16世紀中葉以降の大友氏の権勢と南蛮の商都であったFUNA Iの実態の一端が再現されつつあるのである。



第2図 調査位置図（「戦国時代の府内復元想定図」を改変）

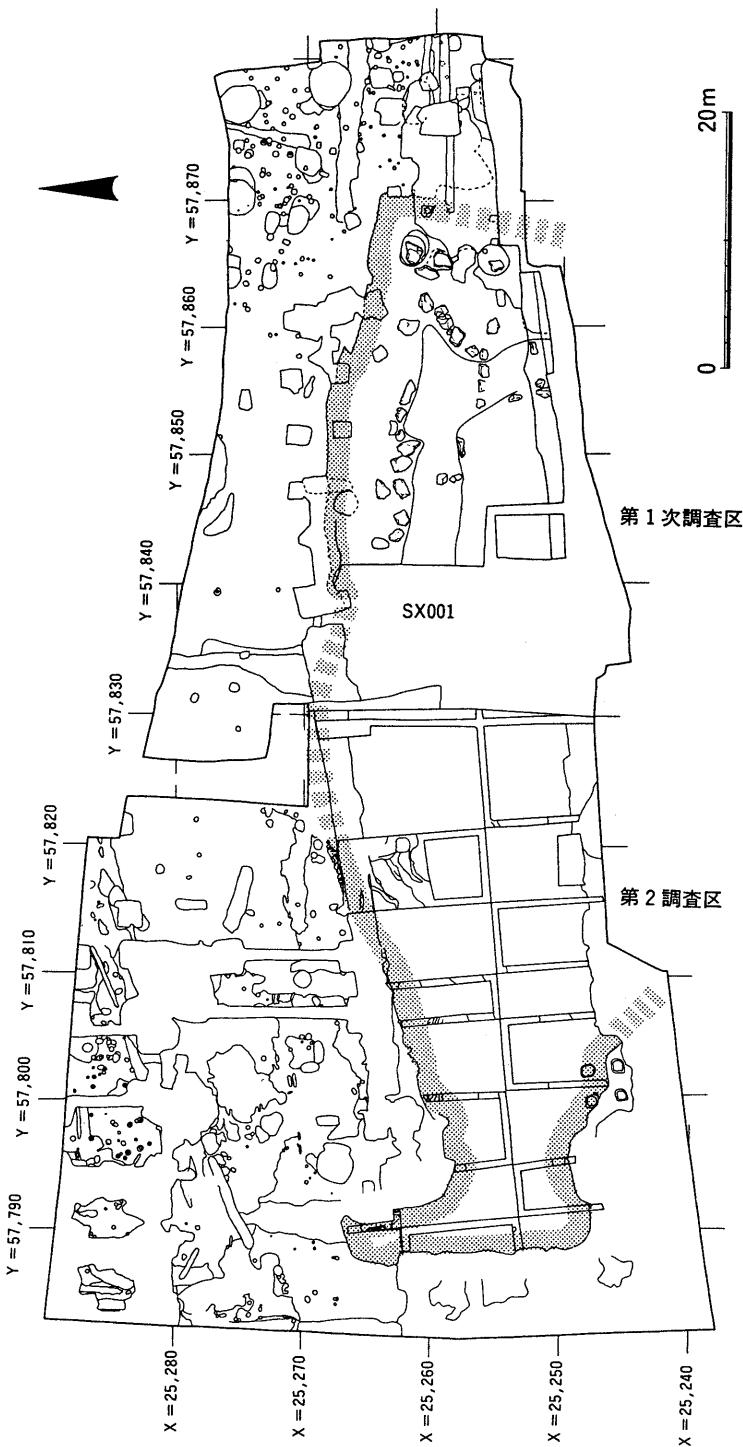
第3章 調査の概要

1 推定大友館跡の東南地区（第1次調査・第3次調査）

第1次調査

第1次調査は大分駅周辺総合整備事業に係る代替地事業に伴って行われた遺構確認調査である。調査地は、「戦国時代の府内復元想定図」によれば大友館跡の東南隅にあたり、大友館の外郭線よりも内側に位置していた。調査は平成10年7月21日から平成11年5月19日まで行われ、その結果大規模な庭園と推定される遺構が検出された。庭園遺構(SX001)以外の遺構としては溝・土坑等があるが、多くは庭園遺構の東側あるいは北東側に集中して検出されており、北側には非常に少ない。今回の調査では庭園遺構の確認に主眼をおいたため、これらの遺構の調査は十分でなく、庭園遺構との並行関係は一部のみしか明らかにできていない。また、大友館の外郭となる施設である溝・堀・築地等は検出できなかつたことから、これらの施設は、今回の調査区よりも外にあると推定される。

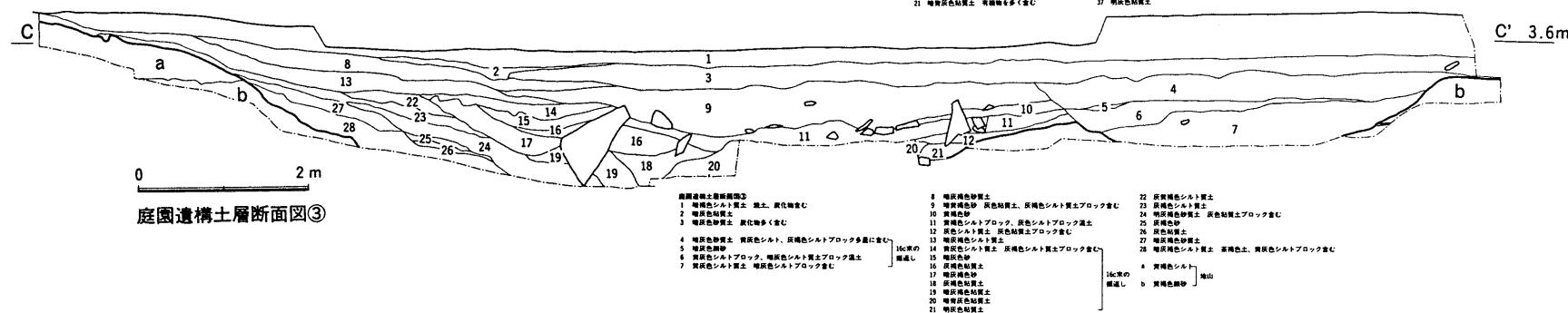
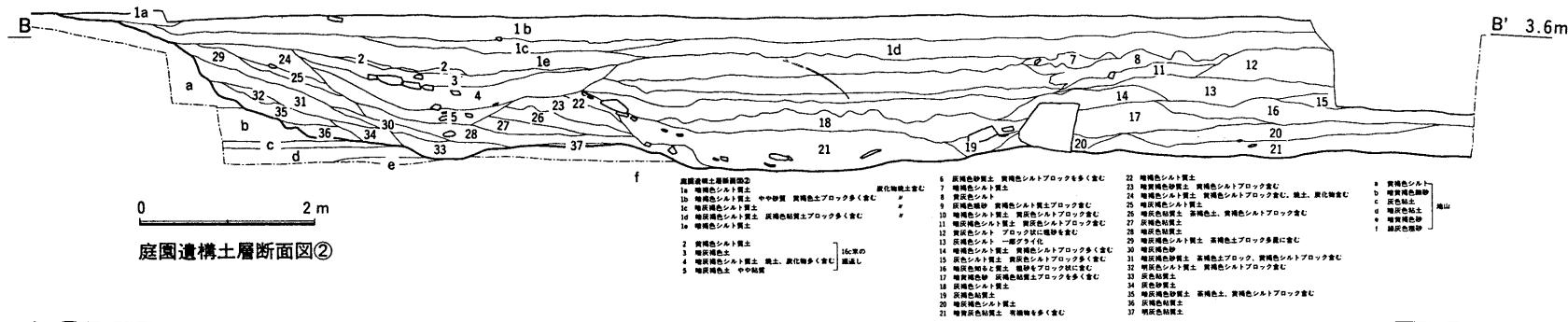
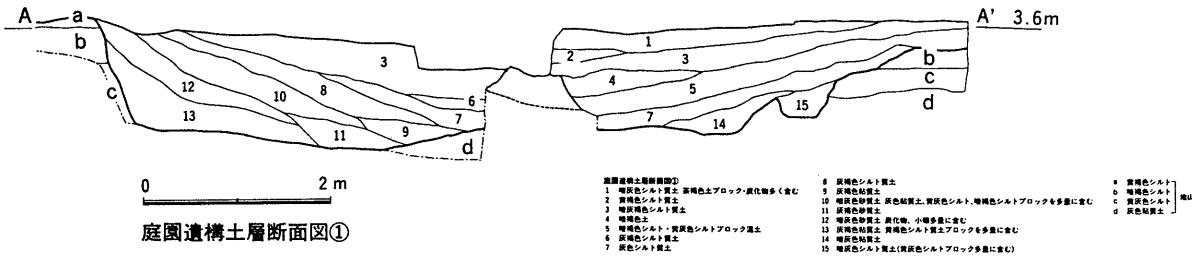
庭園遺構(SX001)は館南辺の推定外郭線に並行し、南北16m以上、東西約35m以上にわたって検出され、西側・南側にはさらに広がっているものと推定された。遺構は当時の地表面を約2m以上掘り込んで築造されており、最も深い部分を囲む形で巨石を使用した石組みが検出された。庭園遺構東端は最も良好に石組みが残っているが、



第3図 大友館跡 東南地区遺構配置図 (S = 1/500)



第4図 第1次調査区 出土庭園遺構平面図 ($S = 1/125$)

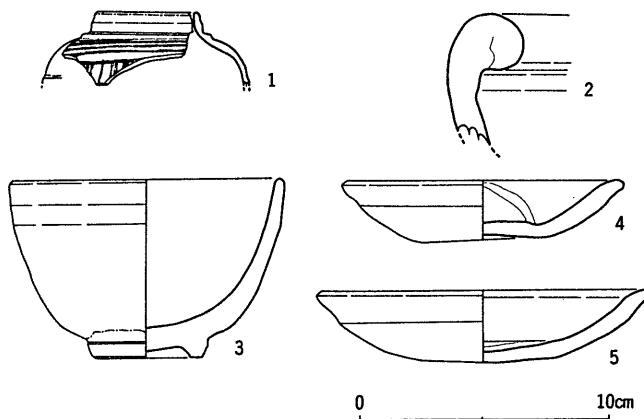


第5図 第1次調査区 庭園遺構土層図①～③ (S = 1/80)

東へ行くほど石組みが狭まって収束し、石の高さも次第に高くなるよう立体的に配置されていたことが窺われる。遺構の一部で断ち割り調査を行い土層の確認を行った結果、最深部を中心に植物遺体等の有機質を大量に含む青灰色土層が20cm以上堆積しており、一定期間湛水していたと判断できた。従って、最深部を池として用いていた可能性が考えられ、周辺の石組みは護岸としての機能も有しているものと考えられる。しかし、今回の調査では池底と考えられる部分に、人為的に粘土や石を敷いていた痕跡は確認できなかった。また、導・排水口は検出できておらず、調査区外にあることが考えられるが、池底のグライ層のレベルから判断される地下水位は池底のレベルよりも高いと推定できることから、自然湧水によって水を得ていた可能性も考えておきたい。護岸状の石組みと庭園遺構北辺の堀り方との間は最大幅約6m程度の緩やかなスロープとなっている。この部分の土層断面によれば、地表を斜めに掘り込んだ後、粘質土、砂質あるいはシルト質土など質の異なる土を斜めに積み上げて、スロープ状に整地していることが観察される。（第5図 断面図①：5～14層、断面図②：22～37層、断面図③：22～28層）

庭園遺構は、15世紀後半代に比定される土坑SK008を切って築造されていることが確認されているため、これ以降に作られたことは確実であるが、スロープ部分の整地土下部より出土した京都系土師器（第6図4・5）の年代観により、16世紀後半に築造されたか、あるいは最終的な改修が施されたものと考えられる。検出された石組みの中には人為的に破碎されているものが見られ、池内の東西2カ所に集中して検出された割石は、破碎され投棄されたものであると考えられる。また、護岸状の石組みも東端部分以外は連続しておらず、かなりの部分が抜き取られていると考えられるほか、移動あるいは倒伏していると考えられる石や、矢穴があけられ、直方体状の石材を割取ろうとした痕跡のみられる石（写真7）も存在するなど、廃絶に先立って大規模な破壊を被っていることが認められた。こうした破壊の後、砂を主体とする土層によります最深部の池部分が埋積し、さらに残った凹地もシルト質土により人為的に埋め立てられている。最終的な埋立てに用いられたシルト質土層には、16世紀末の廃絶時の遺物のほか、15世紀後半から16世紀にかけての幅広い時期の遺物が含まれており、ブロック土も多数含まれていることから館内を削平した土を用いた可能性が考えられる。なお、完全に埋め立てられる前に先立って、一部で大規模な掘り返しが行われていることが土層断面で観察される。遺構を覆う砂質土層あるいはその上のシルト質土層から出土する遺物の中に胎土目段階と推定される唐津焼碗（第6図3）が存在する一方、砂目段階の唐津焼及び志野が存在せず、さらに出土した京都系土師器の中に17世紀初頭に比定できるものがないことから、廃絶年代は1580年代～90年代になる可能性が高い。

庭園遺構から出土した遺物の多くは最上層のシルト質土層からの出土であるが、タイ産の鉄絵小壺片（第6図1）や四耳壺片（第6図2）、華南三彩水注片（写真29）といった希少な貿易陶磁が認められた。一方、池底の青灰色土層中からは下駄や漆器椀・皿、扇の要部分等、有機質の遺物が良好な状態で包含されていることが確認できた。（写真6）また、マツカサも多数出土したことから写真庭園遺構内におけるマツの植栽が想定されるなど、植栽状況の復元も期待される。



第6図 第1次調査区 庭園遺構出土遺物 (S=1/3)

第3次調査

庭園遺構が確認された第1次調査を受けて、平成11年度、市単費による大友館跡第3次調査が行われた。調査は、平成11年11月～翌12年3月まで行われ、庭園遺構をはじめ、貴重な情報が得られた。以下、大友館跡第3次調査について、その内容を速報的に紹介する。

大友館跡第3次調査は、1次調査で未確定となった庭園の西端部の確認、庭園に付属する建物の存在確認を目的とし、1次調査の西側約2300m²が調査対象となった。

調査の結果、庭園遺構については、その西端部が確認され、東西約83.6mを測る規模、西端部分で北側に突出する特徴的な平面形態が明らかとなった。庭園遺構の内部の状況については、サブトレンチによる部分調査が行われ、その土層観察から、庭園遺構が大きく3時期存在することが確認された。最も古く位置づけられるI期の西端部分では、糸切り土師器の集中廃棄の状況及び池の護岸が確認されている。この護岸石は、1次調査で確認されたものとは、石材を異にしており、大きさも一回り小さいものであった。次に、II期に位置づけられる中央部では、テラス状の段を有する断面形態が確認されており、このテラス部分に大量の京都系土師器の集中廃棄の状況が確認されている。最後に東部のIII期については、大型の景石、一部に拳大の円礫を敷き詰めた護岸状況が確認された。

一次調査で確認された庭園遺構は、今回の調査におけるIII期にあたり、庭園遺構が、西から東側へ拡大・改修を繰り返し最終的には、東西約66mを測る大型景石を配するIII期の状況へと変遷したことが明らかになった。

出土遺物には、前述した糸切り土師器及び京都系土師器の大量出土に加え、1・2次調査や、町屋の調査でも特徴的に出土する東南アジア系の輸入陶磁器（ベトナム産長胴瓶・華南三彩壺、鳥形水注等）、I期庭園の糸切り土師器の集中廃棄状況の中から唯一出土した磁州窯系？の壺片等がある。個別の遺物について、京都系土師器については、I期・II期・III期それぞれから出土しており、その形態についても変化が見られるようである。鳥形水注については、頸から背中、尾にかけての大きな破片であり、二次的に熱を受けた状況が確認されている。磁州窯系？の壺片についてもやはり、二次的に熱を受けた痕跡が確認されており、化粧土の有無は不明瞭であるが、鉄絵による纖細な線による絵付けが観察できるものである。

庭園遺構以外の遺構としては、石製礎盤を有する建物、玉砂利集中部等が確認されている。前者については、周辺部の搅乱の状況からその全容は不明であること、庭園遺構との距離が離れすぎていること等の問題はあるが、館内において掘立柱以外の建物が確認されるのは初めてであり、注目されるものとなった。後者については、その土層観察から玉砂利を敷き詰めたと言うよりはむしろ、整地層中に玉砂利が多く含まれているといった状況であり、館内における整地の状況及び、玉砂利が敷かれた庭園（館）内部の状況が確認された。

以上が、大友館跡第3次調査の概要である。特に今回、庭園遺構の西端が確認されたことにより、この遺構が当初の可能性として考えられた堀等の区画施設では無いことが明らかになり、加えて庭園遺構自体の改修・拡張の状況が確認された。このことは、今後の館調査において、その内部構造（館内の施設配置等）及び館の変遷を考える上で貴重な情報もたらしたといえよう。

2 推定大友館跡の西側外郭線地区（第2次調査と第5次調査）

第2次調査

第2次調査地は推定大友館西側外郭線上に位置し、マンション建設に伴う事前調査として平成10年11月4日から同11年4月30日にかけて実施した。

調査の結果、16世紀代の整地層ならびに3面の文化面が確認された。以下にその概要についてまとめる。

第1面は16世紀末～17世紀初頭に比定される遺構群である。平面調査を実施した浅い南北溝跡(SX007)は唐津陶器を含む唯一の遺構であり、第1次整地層を基盤面として形成されている。

この第1次整地層については、調査最終段階における調査区壁の土層観察により検出されたものである。

また、この作業では第1次整地層を基盤面として一定量の溜まり状遺構の存在も確認でき、面的な遺構の広がりが想定される。

その下位である第2面では、大規模な南北溝跡(SD001)をはじめ、柵列跡や土坑等が検出され、出土遺物より16世紀末に比定される。

これらの遺構群は16世紀後半と考えられる第2次整地層(SX065)を基盤面として形成されたものである。遺構密度は少なく、この段階の館の外郭線を示す遺構については検出されていない。

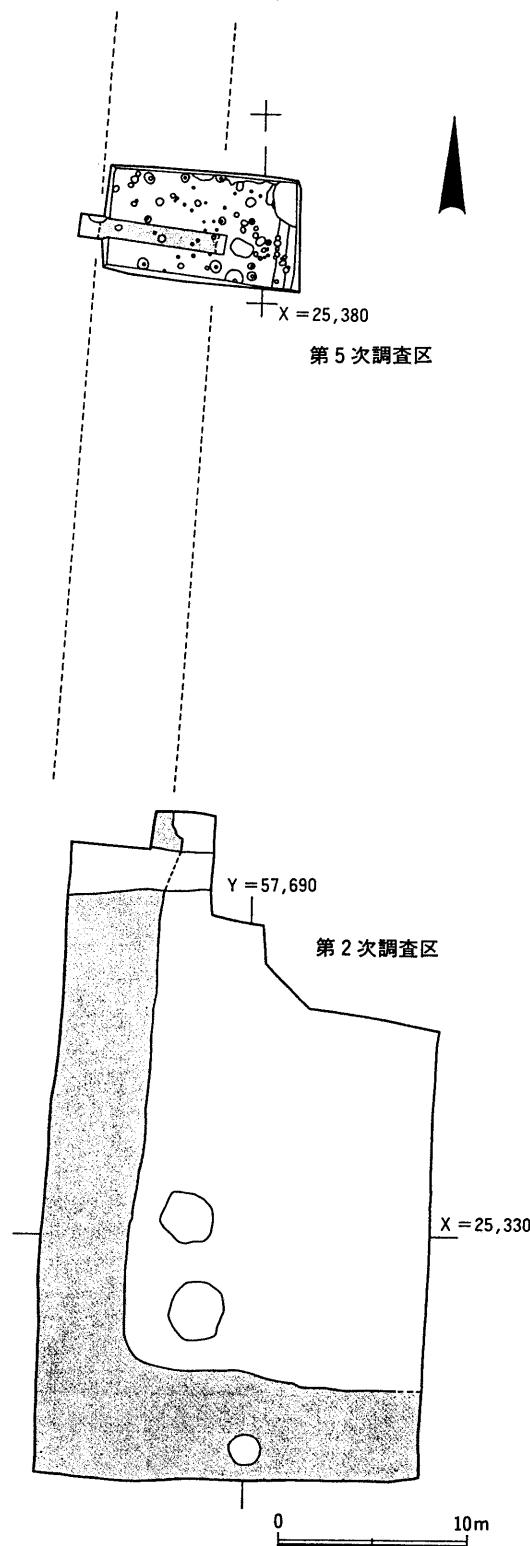
この第2次整地層(SX065)については最深部で約80cmを測り、調査区のほぼ全面において確認された大土木事業である。埋土は暗黄茶色ブロック土を基調とし、砂層やシルト質土層の堆積も見受けられるものの、不整合な堆積状況を呈しているため、一連の堆積土と判断できるものである。(第12図)

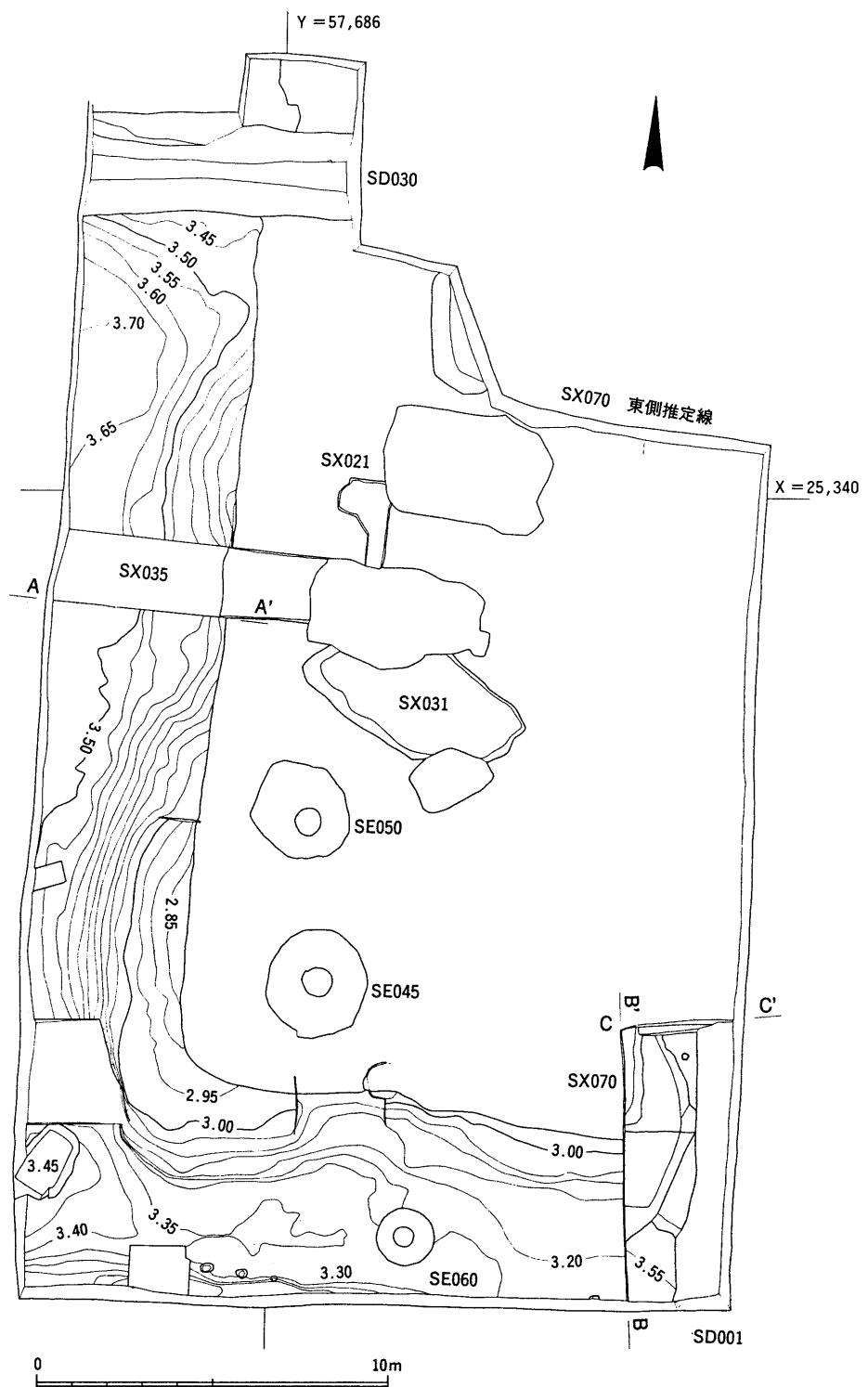
この整地層からは中国染付碗のB₂群・E群や皿のB₂群をはじめとして、中国南部産の見込み蛇の目釉剝ぎの白磁皿や豊後型火鉢片、京都系土師器皿などが出土している。

第10図の1～3は第2次整地最下層(SX031)から出土した京都系土師器皿であり、塩地(1999)の第2期・16世紀後半に相当するものである。

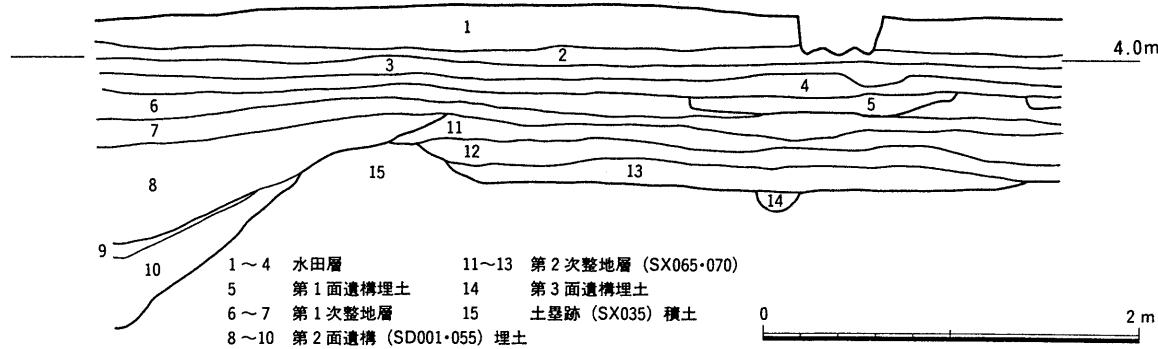
また、第2次整地に伴って行われた掘削地業については先述のSX031をはじめ、調査区壁の土層観察によって南北方向を主軸とした大きなプランが想定できる。(第9・13図)

さらに、第3面は第2次整地層(SX065)の下位にお 第7図 西側外郭線地区 遺構配置図(S=1/400)





第8図 第2次調査区・第3面遺構平面図 ($S = 1/200$)



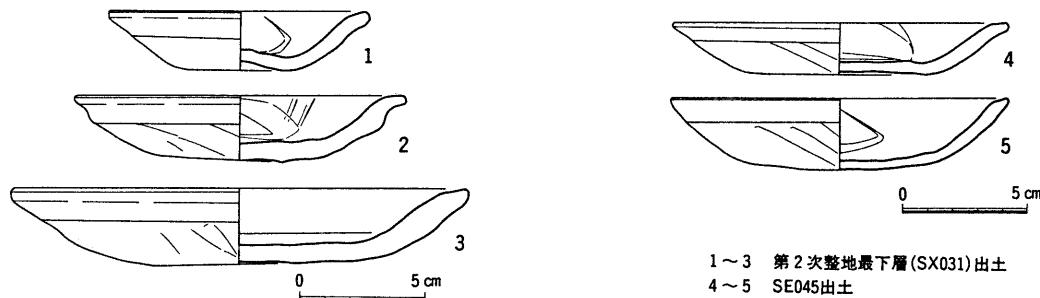
第9図 南側調査区壁土層図 ($S = 1/40$)

いて確認された遺構群であり、出土遺物より16世紀前半～中頃に比定される。

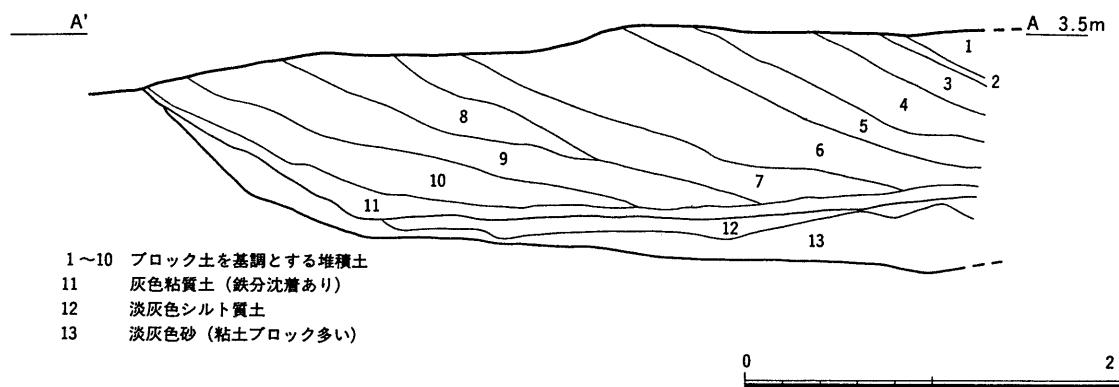
検出された遺構群はL字状に折れ曲がる土壘跡をはじめ、大規模な東西溝跡(SD030)ならびに井戸跡3基(SE045・050・060)と不定形土坑などである。(第8図)

土壘跡(SX035)については推定大友館西側外郭線上において検出されたものであり、調査区内(推定西側外郭線のほぼ中心)においてL字状に屈曲する。その規模は現状で南北幅約5m、東西幅約6mを検出したが、調査区外にも延びていることから、検出幅を大幅に上回る可能性が高い。基底部から頂部までの比高差は約30cmを測る。

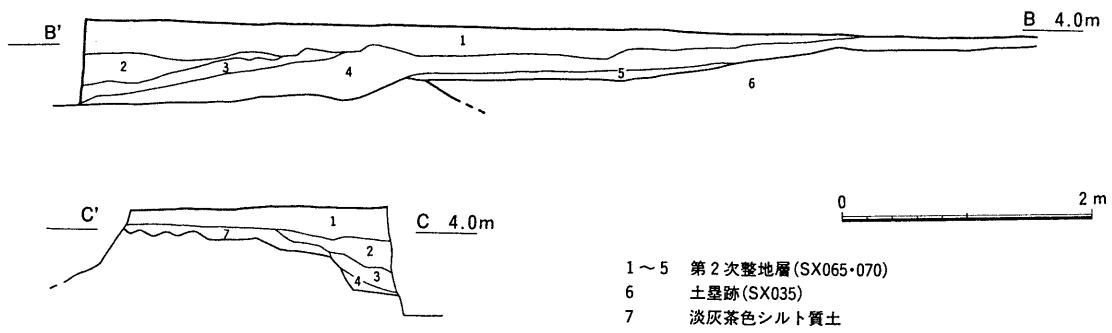
その構造については、基盤層を掘り込み、そこに茶色ブロック土と灰色ブロック土を大きな単位として、中央部に向けて斜め方向に積み上げている状況が看取される。(第11図)



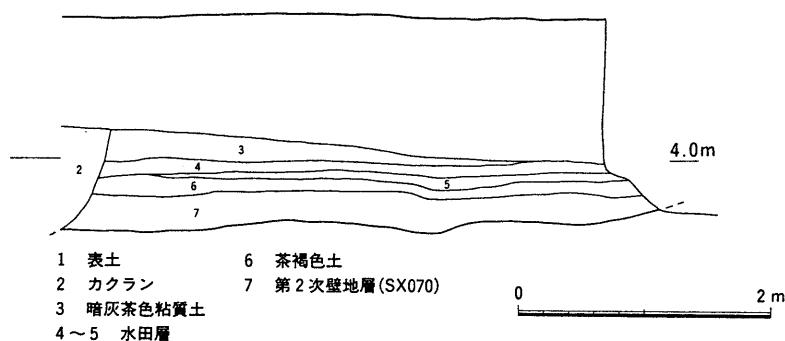
第10図 第2次調査区 出土遺物 ($S = 1/3$)



第11図 土壘跡 (SX035) 土層図 ($S = 1/40$)



第12図 第2次整地層(SX065・070)土層図 (S = 1/60)



第13図 SX070北側調査区壁土層図 (S = 1/60)

さらに、東西部分の傾斜は先述の第2次整地に伴って行われた掘削地業の方向性と直行して盛り上がっており、堀り方内の斜堆積は土壘の積み土である蓋然性が極めて高いと判断している。

積み土内からは第1期に比定される京都系土師器皿が出土しており、土壘の構築時期については16世紀中頃と考えられる。

また、この土壘跡に重複して東西溝跡 (SD030) と井戸跡 (SE060) が形成されている。(第8図)

前者からは中国南部産の見込み蛇の目釉剥ぎの白磁皿やタイ・ノイ川窯産焼締陶器、後者からは中国染付皿B₁類をはじめ、大量のロクロ土師器が出土している。

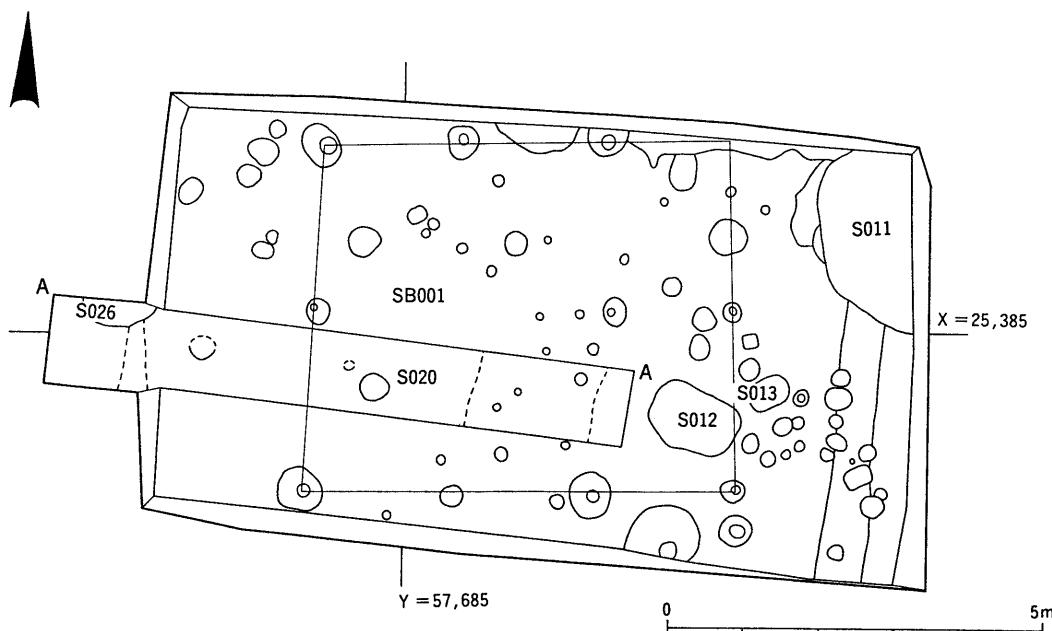
第10図の4・5に示した遺物はSE045から出土した京都系土師器皿であり、4は井戸の埋め戻しに伴って埋置されたものである。第1期・16世紀中頃に比定される。

この他にも今回の調査ではガラス製壺や鉄砲弾(鉛玉)をはじめ、華南三彩鳥形水注や朝鮮王朝産白磁碗、そして威信財として位置付けられる青磁掛花入なども出土している。

(塩地)

第5次調査

第5次調査区は、推定大友館の西側外郭にあたる。大友館第2次調査で確認された土壘(SX035)の延びを確認するため、その延長線上に $6 \times 10\text{m}$ 、面積において 60m^2 の調査区を設定した。調査によって、整地層(S019)を挟んで上下に遺構が確認された。遺構としては、16世紀前半～中頃に比定される土壘跡(S020)、16世紀後半の土坑(S026)、16世紀後半の整地層(S019)、井戸跡(S011)、掘立柱建物跡(SB001)などで、その他にピットを数十基、土坑を数基、溝、不定形の堀り込みを検出した。

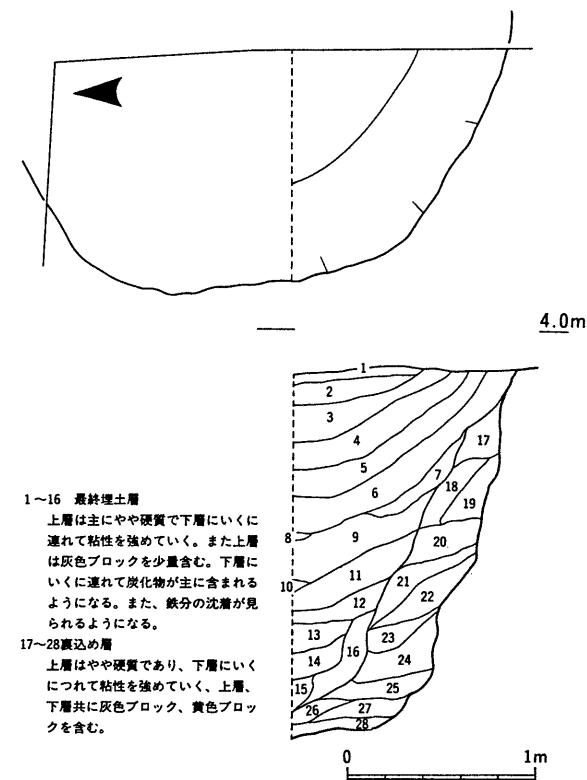


第14図 第5次調査区 遺構平面図 ($S = 1/100$)

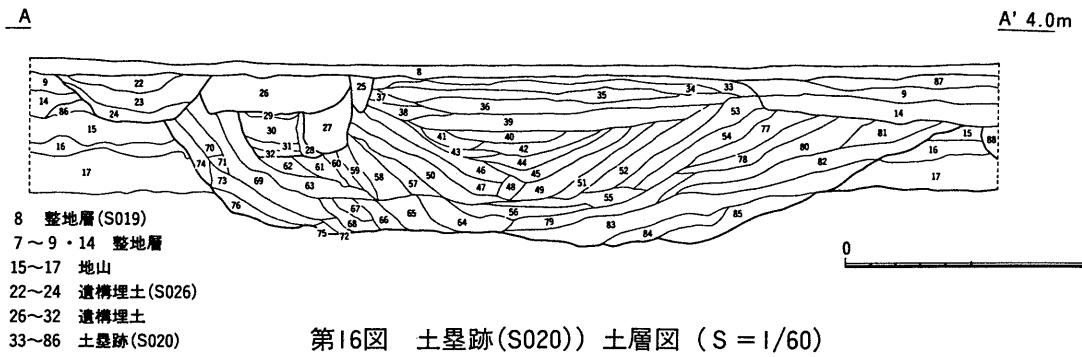
調査区は、地表から約80cmほど現在の埋土が見られ、その下部は江戸時代の水田層が幾重にも堆積した状態である。その層を除去した段階で16世紀後半の整地層(S019)が検出でき、これを基盤面とする遺構の存在が確認できた。

この整地層を基盤面として形成された遺構には、大型の掘立柱建物跡1棟(SB001)、井戸跡1基(S011)、溝状遺構1条をはじめ不定形土坑やピットが見られた。

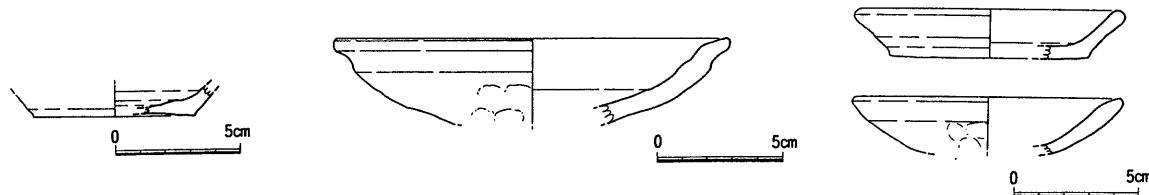
特に掘立柱建物跡(SB001)は、現状で 2×2 間の建物の東側に庇が付いており、建物配置はN-2~3°-Eである。なお、建物の桁行はさらに調査区外側に延びていることが予想される。規模は桁行間隔が $2.2 \sim 2.4\text{m}$ 、梁行間隔が 1.9m あり、直径約 $30 \sim 60\text{cm}$ の柱穴で構成されている。柱穴にはそれぞれ柱痕がはっきりと確認でき、それらには焼けた建物の壁材の一部や炭化木が大量に含まれている。のことから、建物は火災によって消失したことが窺える。時期的には、時期を比定できる遺物の出土が少ないものの、近世段階の遺物が含まれない事、整地層に含



第15図 井戸跡(S011)平面・土層図 ($S = 1/40$)



第16図 土壘跡(S020) 土層図 (S=1/60)



第17図 SB001出土遺物 (S=1/3)

第18図 S011出土遺物 (S=1/3)

第19図 S026出土遺物 (S=1/3)

まれる遺物が16世紀後半を下るものがないことから、16世紀後半の範疇に比定される。火災については、天正14～15年（1586～1587）の島津軍による府内進攻による原因も可能性として注目される。

また、井戸跡（S011）も同じく16世紀後半と考えられるが、建物と共存していたかは不明である。掘り方の直径は2.5m以上になり、深さは検出面より1.95mを有する。埋土状況は、2重に堆積した状況が確認できることから本来は井筒が存在していたものが、廃棄段階で抜かれたものと考えられる。

整地層（S019）は、掘建柱建物（SB001）や井戸（S011）の基盤面となる面である。土壘（S020）の上面を削った後に整地した層で土壘上面から厚さ10cmを確認し、土壘裾部からは、約40cmもの堆積状況が見受けられる。出土遺物より16世紀後半の大規模な土木事業の一部であると思われる。なお、この整地は第2次調査の第二次整地層（SX065）と同一である。

整地層（S019）の下位においては、南北方向に伸びる土壘跡（S020）が検出された。土壘跡は、逆台形状に掘り込まれた中に質感の異なる土を左右から内側に向かって斜めに堆積させ、その中心でやや締まった土を水平に堆積させた積み方をおこなっている。法面の高さは、上面が削平されており、現状で約30cmほどが残っているにすぎない。その規模は、現状で頂上部幅4m、裾部幅7.3m、底部幅3.3m、積土の高さは掘り込み面から1.3mを有する。

この土壘跡は、南に30m離れた第2次調査のL字状（東西・南北方向）に確認された土壘（SX035）の延長線上にあたり、南北方向はN-4°-Eに振っており、さらに調査区の北に延びていることが判明した。現在見られる地籍の方向からすれば、やや東側に振った状況である。

なお、土壘が削平され、整地層（S019）が形成される前の段階で土坑（S026）が作られている。規模は、直径約1.2m、深さ35cmであり、出土遺物から16世紀後半に比定される。

今回の調査では、16世紀前半～中頃の土壘の規模と構造は明らかになったが、これに付随する可能性の高い堀を確認する事が出来なかった。また、16世紀後半段階には土壘を削平した上面に建物や井戸を形成しており、この段階における館を区画する土壘や堀などの施設の存在も確認できなかった。これについては、今後の調査によって検証すべき課題である。

（池邊）

3 推定大友館跡の中央地区（第4次調査）

第4次調査

第4次調査区は、推定大友館の中心にあたり、主殿もしくはそれに付随する施設が検出されることを想定して調査が行なわれた。調査区は11×12mの132m²で、調査区より東側では標高が一段高くなった立地である。

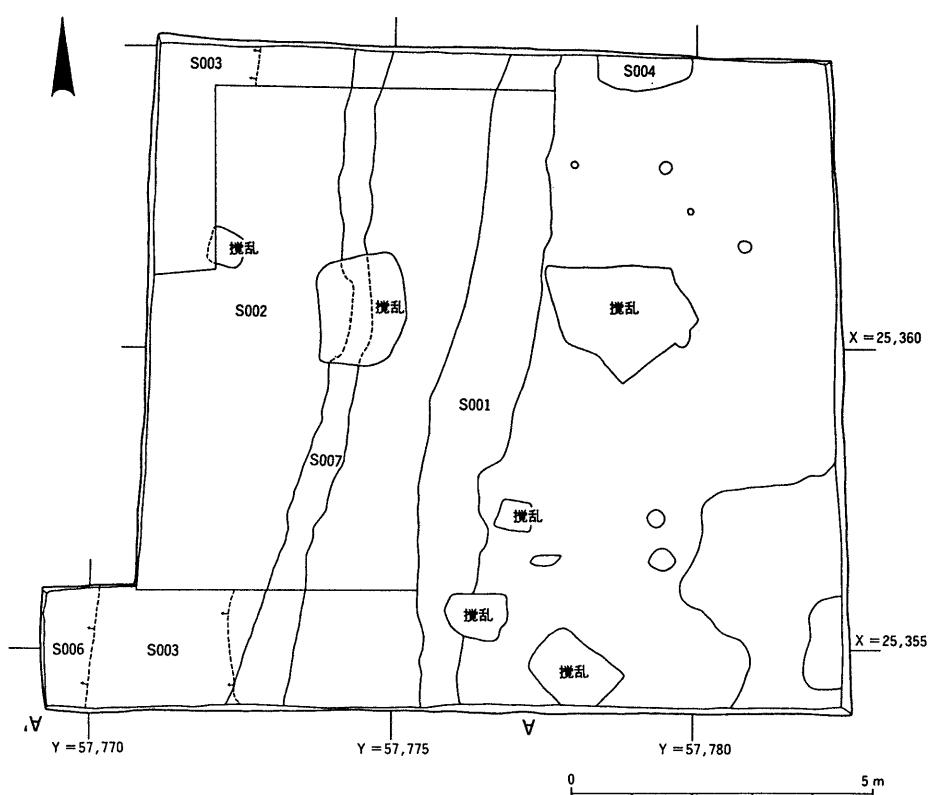
調査の結果、16世紀中頃の大溝（S003）、16世紀中頃の区画溝（S006）、16世紀後半の整地事業跡、平行する2本の区画溝（S001・S007）、廃棄土坑（S004）がそれぞれ確認できた。その他は、ピット数基と攪乱である。このため、当初予想していた主殿関連の建物遺構は確認されなかった。廃棄土坑（S004）を除いた主要遺構はすべて調査区の西側に集中し、調査区東側では、地山の淡黄褐色の砂層がすでに露出していることから、東から西にかけて緩やかに傾斜していた立地が、近世以降の水田耕作によって削平され、浅い遺構はすべて消失したものと考えられる。

調査区は、地表から約25cmほど現在の埋土が見られ、その下部は江戸時代の水田層が堆積した状態である。その層を除去した段階で16世紀後半代の整地層が検出でき、これを基盤面とする遺構の存在が確認できた。検出した遺構は、廃棄土坑（S004）と溝状遺構（S001・S007）である。

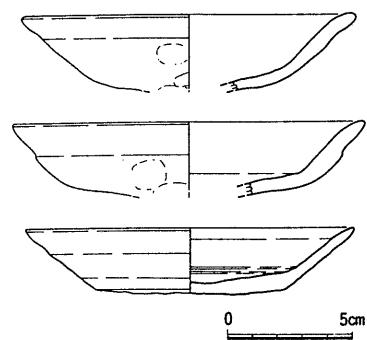
廃棄土坑（S004）は調査区北東側で検出され、直径1.7mを有する。出土遺物には、16世紀後半代の京都系土師器が多量に出土している。

2本の溝状遺構（S001・S007）は整地層（S002）を基盤面として掘削されており、S001とS007は共に幅約1m、深さは検出面から約10～15cmを有する。この2本の溝は2m間隔で平行に南北（N-8°-E）に延びている。上面は削平を受けているため遺構の状況は良好ではないが、遺構の性格として館内を分けていた区画溝か道路側溝の可能性が高いと考えられる。

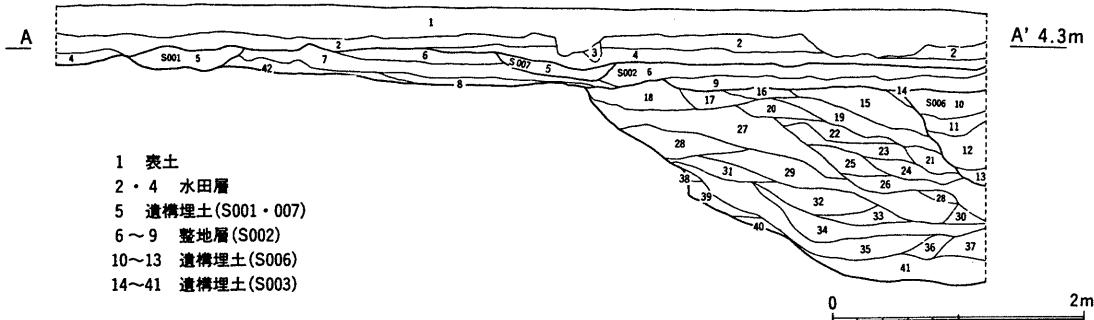
整地層（S002）は、調査区の中心から西側全面に確認されるが、さらに広い範囲に及んでいる事が想定される。整地層は水田層までの約20cm



第20図 第4次調査区 遺構平面図 (S = 1/125)



第21図 S004出土遺物 (S = 1/3)



第22図 S001・S002・S003・S006・S007土層図 ($S = 1/60$)

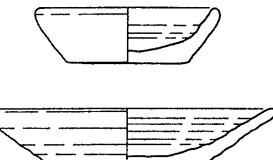
の厚さで堆積が確認でき、その下部には溝状遺構 (S006) とこれより古い時期の大溝 (S003) が見られる。このことから、遺構の埋め戻し後の地盤改良による整地事業と考えられる。整地堆積土中には16世紀中頃に比定される多量の京都系土師器や庭園で見つかっている白い玉砂利（石英）が出土しており、周辺部に存在していた遺構を削って埋められたことが想像できる。また、多量の京都系土師器の存在から、当該地において館内における儀礼が頻繁に執り行われたことが窺える資料である。こうした整地事業は、この時期に第2次・3次・5次調査区においても確認されていることから広範囲で大規模な土木事業がおこなっていたことが窺える。

溝状遺構(S006)は、整地層(S002)の下部から検出され、大溝(S003)が埋め戻された段階に掘り込まれたことが確認できた。遺構は、調査区外側に延びているものの推定で幅1.5mを越え、深さは整地層下から0.75mを有し、N-6°-Eに振って南北方向にそれぞれ真っ直ぐに延びている。堆積状況は、砂質の4層に分けられ、最下層のみ自然堆積層である。遺構の堆積状況や形状からすれば、区画溝もしくは道路側溝の可能性が高いと考えられる。遺構の年代は、堆積層から出土した多量の非ロクロ成形の京都系土師器とロクロ成形の土師器により、16世紀中頃に比定される。

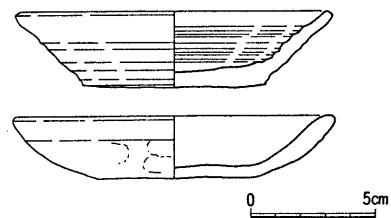
大溝 (S003) は、整地層 (S002) の下部から検出され、調査区で最も古い遺構である。遺構は西側の調査区外に延びているが、推定で幅5mを越え、深さ1.6mの規模を有し、N-2°-Eに振って南北方向に延びている。土層の堆積状況は、底の部分に東側斜面よりずれ落ちた地山の砂層が帯状に堆積した自然堆積層があり、大半は砂利混じりの砂と黄茶色の砂を交互に堆積させた人為的な堆積土層が確認できた。出土する遺物から16世紀中頃に比定される。

今回の調査で確認された大規模な大溝 (S003) は、2町四方の推定大友館跡の中心を二分する状況にあり、16世紀中頃～後半にかけては、館内において改修・拡張等の整地事業がおこなわれたことが各調査区で確認されている。こうした状況からすれば、16世紀中頃段階では現在推定されている方2町四方の推定大友館跡以前の施設であった可能性も考えられる。さらには、第2次調査と第5次調査で確認された土壘とは同一の時期に相当していることから、これら一連の施設の関連も示唆されよう。これについては、今後の調査により検証できればと考えている。

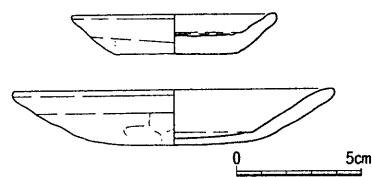
(池邊)



第22図 S002出土遺物 ($S = 1/3$)



第23図 S006出土遺物 ($S = 1/3$)



第24図 S003出土遺物 ($S = 1/3$)



写真1 推定大友館跡 全景空中写真(上が北)



写真2 推定大友館跡 東南地区空中写真(第1次調査区と第3次調査区の写真を合成)



写真3 第1次調査区 全景(西より)



写真4 第1次調査区 庭園遺構東端の石組み

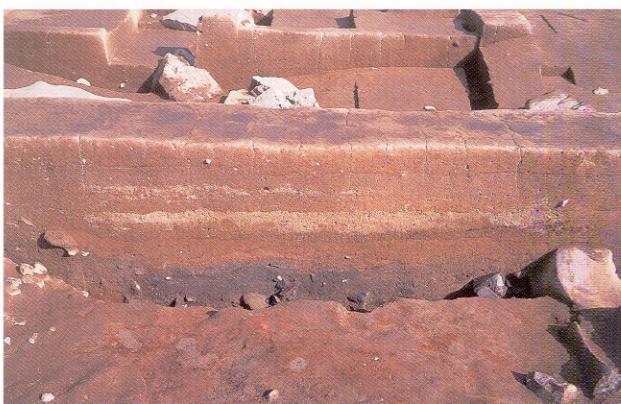


写真5 第1次調査区 庭園遺構土層第4図(B-B'間)



写真6 第1次調査区 庭園遺構最下層遺物出土状況



写真8 第3次調査区 景石検出状況



写真9 第3次調査区 糸切り土師器出土状況

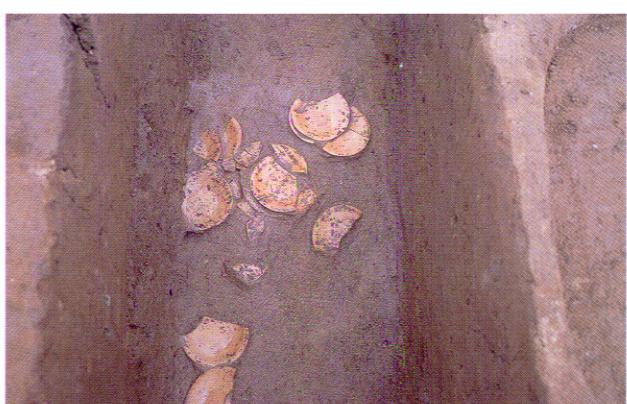


写真10 第3次調査区 京都系土師器出土状況



写真11 第2次調査区 第3面遺構全景

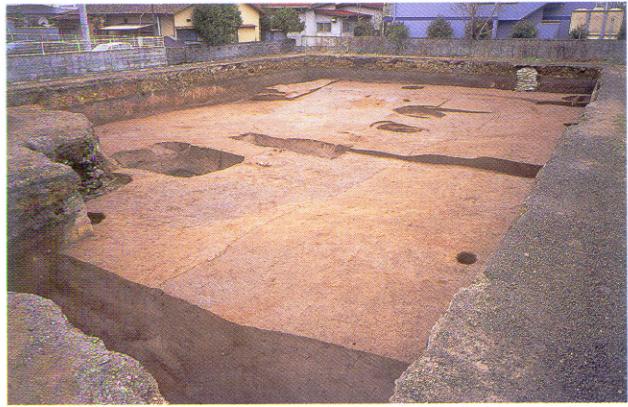


写真12 第2次調査区 第3面遺構全景(北西より)



写真13 第2次調査区 土壙跡(SX035)東西部分近景(東より)



写真14 第2次調査区 井戸跡全景(西より)



写真15 第2次調査区 SE060 遺物出土状況(北より)



写真16 第2次調査区 南側調査区壁土層(北より)



写真17 第2次調査区 盛土整地層(SX065、070)土層(北より)



写真18 第2次調査区 土壙跡(SX035)断面(北より)



写真19 第5次調査区 全景(東より)

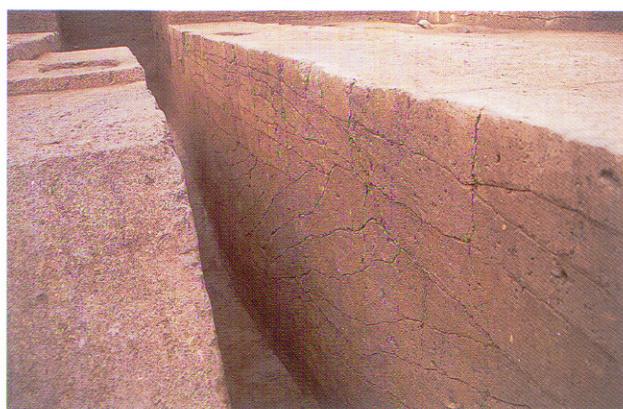


写真20 第5次調査区 土壙跡(S020)断面

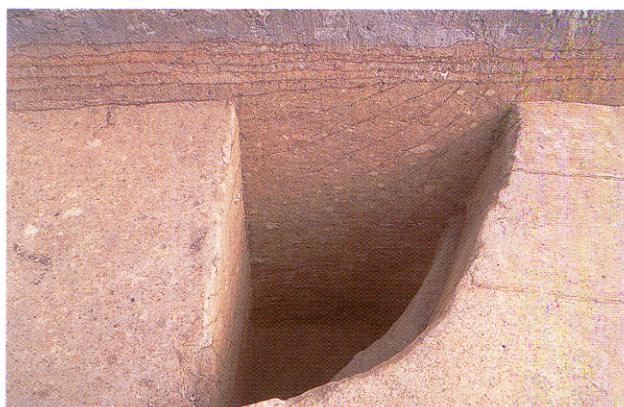


写真21 第5次調査区 井戸跡(S011)断面

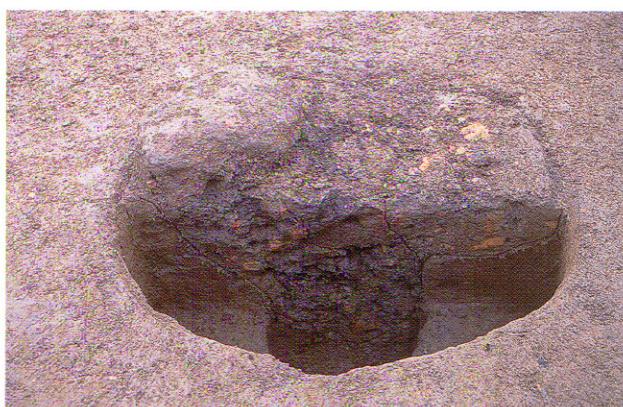


写真22 第5次調査区 掘立柱建物跡(SB001)柱穴断面



写真23 第4次調査区 全景(北より)



写真24 第4次調査区 大溝(S003)・溝状遺構(S006)断面



写真25 第4次調査区 整地層(S002)・大溝(S003)・溝状遺構(S006)断面



写真26 第4次調査区 廃棄土坑(S004)遺物出土状況

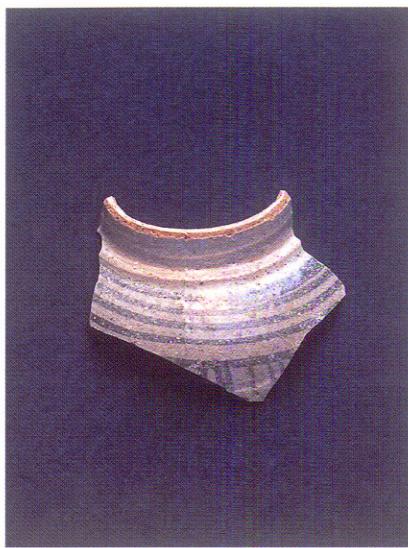


写真27 タイ鉄絵小壺片

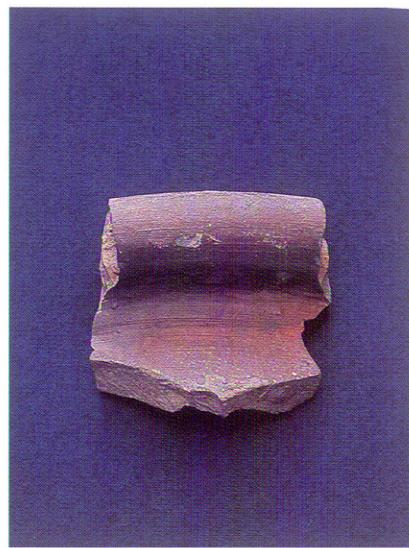


写真28 タイ四耳壺片



写真29 華南三彩水注片



写真30 暗青灰色粘質土層出土 漆器碗

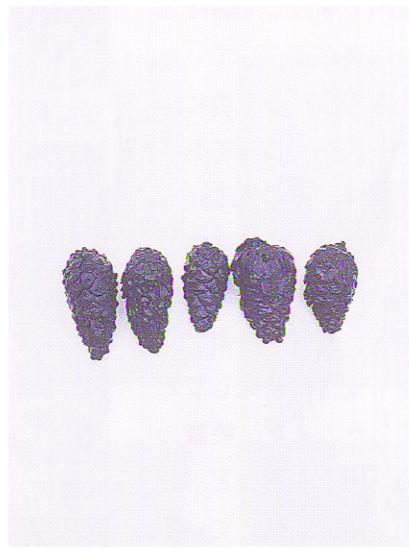


写真31 暗青灰色粘質土層出土 マツカサ



写真32 暗青灰色粘質土層出土 木製下駄

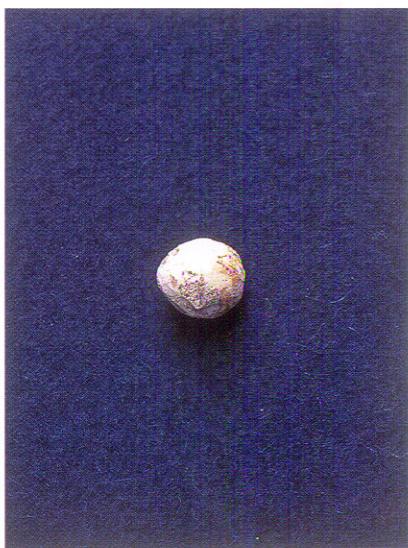


写真33 鉄砲弾

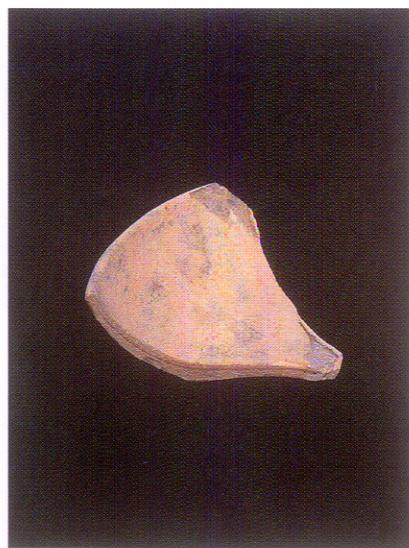


写真34 ガラス製小杯片

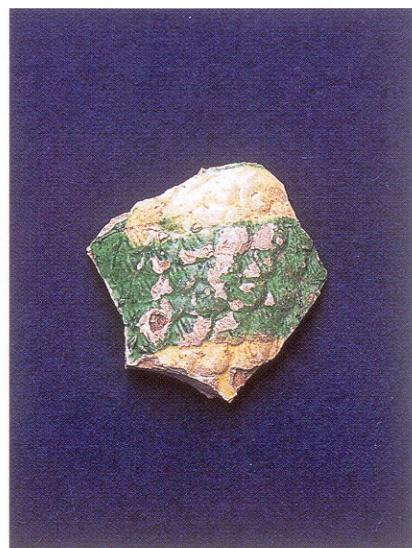


写真35 華南三彩鳥形水注片

写真27～32：第1次調査区 庭園遺構出土遺物

写真33～35：第2次調査区 出土遺物

4 町屋の調査

(1) 中世大友城下町跡 1次～3次調査

「戦国時代の府内復元想定図」によって横小路町に比定された地点にあたる。平成8～9年度に駅周辺総合整備事業に伴って大分市教育委員会により調査が行われ、大友氏関連遺跡についての本格的な発掘調査の端緒となった。調査の結果、幅10mにも及ぶ道路遺構が、「戦国時代の府内復元想定図」とほぼ一致する位置で確認され、絵図に基づく現地比定作業の正しさが初めて実証された。道路遺構は掘り込み地業の手法で砂、砂利、粘土を版築状に突き固めて築かれており、これを挟む形で16世紀を主体とする遺構群が濃密に展開していた。道路遺構の地業の下からも大溝等の遺構が検出されているが、これらの遺構群から出土した土師器には、京都系土師器が無く、糸切り土師器のみであり、道路築造時期は16世紀前半以降、おそらくは中頃になる可能性が高いことを示している。

とくに注目すべき遺構としては3次調査において道路遺構の北側で検出された、大甕埋設遺構(SX210)がある。これは本来、備前焼大甕を2列10基並べて埋設していたと推定されるもので、このうち5基のみに甕が残存していた。これら10基の甕及びその抜き取り穴と考えられる土坑には大量の陶磁器が焼土や炭化物とともに一括廃棄されており、出土状況と陶磁器の年代観から、天正14～15年(1586～1587年)の島津軍の府内侵攻後に行われた火災処理遺構と推定された。出土した陶磁器類には9個体を数えるタイ産陶器四耳壺をはじめ、ミャンマー、ベトナム等の東南アジア産陶器類、及び朝鮮王朝産陶磁器をも豊富に組成しており、希少な華南三彩壺も複数含まれていた。また、複数の中国南部産の陶器貯蔵具や焼締擂り鉢も出土するなど、貿易による直接的な持ち込みを想定できる組成を示している。この資料は、年代の一定点を知ることのできる資料であるのみでなく、大友氏が行ったとされる南蛮貿易・対朝鮮王朝貿易の一端を示し、また府内がその一拠点とされていたことを示す重要資料として注目される。

なお、本調査地点ではSX210と同様に多量の焼土と炭化物を含む土で埋積した同時期と推定される遺構は他にも多く認められるが、これに後続する16世紀末～17世紀初頭の遺構は確認できていない。(高畠)

(2) 中世大友城下町跡 4次調査

上市町に比定される地点にあたり、平成10年度にマンション建設に伴って調査が行われている。調査の結果、16世紀末・16世紀後半・16世紀中頃・15世紀代に位置付けられる遺構面が確認され、それぞれの遺構面からは、土壌・溝跡・井戸跡・道路跡・集石等の遺構群が全面に検出された。



写真36 第1次調査区 全景

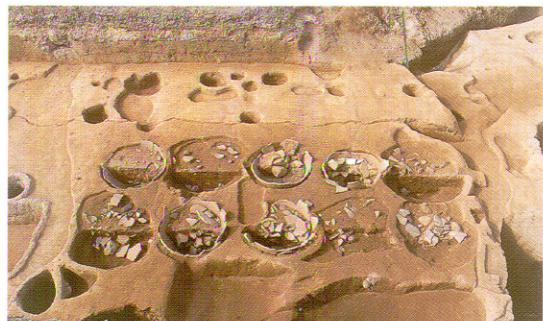


写真37 大甕埋設遺構(SX210)



写真38 大甕埋設遺構内 遺物出土状況



写真39 第4次調査区 全景(空中写真)

前述の島津軍の府内侵攻に伴う火災処理土坑は、当該調査区でも確認された。この火災処理土坑の中には道路面を切る形で検出されてるものも含まれており注目される。尚、こうした火災の痕跡は、16世紀後半代にも認められている。

この他各時期ごとの注目される遺構には、16世紀末の遺構面で検出された焼けた石が詰まった土壙、集石遺構、16世紀後半の遺構面で検出された井戸跡、溝跡の埋土中より貝、魚骨、獸骨等の廃棄状況、最終的には廃棄土坑として使用されているが、その前段階において鋳造関連遺構であった可能性を有している遺構、16世紀中頃～15世紀代に遡る井戸跡、土坑等がある。

出土遺物については、糸切り、京都系土師器坏、皿類、鍋、擂鉢、火鉢等の雜器類、青磁、白磁、染付等の輸入陶磁器類、備前焼、瀬戸、美濃窯系等の国産陶磁器がある。糸切り、京都系土師器坏、皿類については、各時期ごとにおける両者の共伴関係や、京都系土師器のみによる埋納等が確認されている。鍋、擂鉢、火鉢等の雜器類については、周防系とされる擂鉢等の出土が一定量認められる。輸入陶磁器類については、青磁、染付における焼成不良の粗製品が認められることと、華南三彩、タイの四耳壺、ベトナム白磁等中国南部及び東南アジア産の陶磁器の存在が認められる。国産陶磁器については、瀬戸美濃窯系の遺物の確認が特筆される。（河野）



写真40 タイ四耳壺



写真41 ミャンマー黒釉三耳壺



写真42 ベトナム焼締長胴瓶



写真43 朝鮮王朝白磁皿



写真44 華南三彩五耳壺



写真45 青花皿

写真40～45：第3次調査区 SX210出土遺物

第4章　まとめ

これまでの発掘調査によって明らかとなった事実を踏まえ、ここでは大友館と府内の発展過程についてまとめてみたい。

推定大友館跡における発掘調査では、先述のとおり館の存在を傍証する遺構群が検出された。その初現についてはなお不明と言わざるを得ないものの、16世紀中頃には大規模な土壘が築造されていたことが第2次、第5次調査地点の位置する推定西側外郭線付近で確認された。この土壘跡については第2次調査区内においてL字状に屈曲しており、この段階の館が絵図を基にした方2町の復元プランと異なった様相を呈していた可能性が指摘できる。さらに第4次調査地点ではこれと同時期の堀である可能性も推定される南北方向の大溝が検出されている。また、16世紀中頃～後半にかけては西側土壘と重複して遺構が展開するようになり、16世紀後半には土壘が削平され、最深部で約80cmを測る大規模な盛土整地によって館内が整備される。この整地面上に形成された16世紀後半～末段階の遺構には掘立柱建物跡や柵列さらに井戸跡などが検出されたものの、館の西限を示す遺構については確認できていない。以上のことから、この盛土整地は館の拡張を意図した大土木事業である蓋然性は極めて高いと考えられる。

第1次調査で検出された庭園遺構は、この盛土整地が行われた16世紀後半に造られたか最終的な改修が行われた可能性が高いと考えられ、館の整備・拡張に伴って庭園遺構も整備されたと考えられる。この庭園遺構については16世紀最末期(1580～90年代)には大きく破壊されており、館の廃絶時期を示唆していると判断される。遺構の大規模な破壊については、推定された廃絶年代を踏まえると、現状では以下の三者を想定できよう。第一には、天正14～15年(1586～87年)の島津軍による府内侵攻が挙げられる。庭園遺構から出土した陶磁器の中に火を受けたものが多いことから、当該期に館が火災にあった可能性が高いと考えられ、その際庭園部分も何らかの破壊を受けた可能性が考えられる。第二には、史・資料的には指摘できないが、大友義統の豊後除国後、文禄3年(1594)府内に入部した早川長敏により館の破却が行われた可能性が想定される。第三には1597年に始まる府内城築城に伴う石垣用石材の回収等による破壊が考えられる。庭園遺構で検出された矢穴があけられた石は、その傍証になる可能性がある。また、最終的な埋め立てに先立つ大規模な掘り返しについてもこうした石材回収を目的としたものであった可能性が考えられる。

中世府内町についてもこれまでの発掘調査で、絵図による推定範囲において大規模な町屋の存在を裏付ける遺構群が検出されている。その初現については、平安時代末に大分川河口西岸一帯に開かれた「市」がそのルーツとなったと考えられている。「市河」と呼ばれた大分川河口西岸一帯は、中世府内町の「上市町」「工座町」にあたることから、平安時代末に遡る遺構の存在が期待されたが、これまでの調査では確認されていない。中世府内町の形成時期に関する資料としては、第1次～3次調査における道路状遺構下層の京都系土師器を含まない16世紀前半以前の溝跡、第4次調査における15世紀代の遺物を含む土坑等があり、後者は現在まで知られている町屋遺構の確実な上限時期と考えられる。絵図に記された道路については、大規模な掘り込み地業により築造されたことが判明しており、その築造時期は現在のところ16世紀中頃である可能性が高い。掘り込み地業の手法は、館推定地で検出された土壘遺構及び庭園遺構にも認められ、その共通性が今後注目される。また、平成12年度には舟入付近に比定される中世府内町の北端近くで調査が行われ、この地点では16世紀の中頃になってはじめて遺構が展開したとの調査所見が得られている。

一方、遺構・遺物が最も集中する時期は、16世紀の後半～末であり、最終的には第4次調査地点で検出された焼土層や火災処理土坑さらに第3次調査地点の大甕埋設遺構(SX210)にみられるように1586年の島津軍による府内侵攻で廃絶したものと推定される。

以上のことから、館と町の変遷過程においては、まず16世紀中頃に大きな画期が存在すると考えられる。

具体的には館に土塁が築かれた段階に町の中心部では道路が整備され、絵図に記された府内の範囲までようやく町が形成された可能性が指摘される。またこの時期には、京都系土師器が導入されたと考えられ、遺構に見られる整備状況と連動する現象として指摘できる。16世紀後半になると、館が拡張されて絵図にみられる規模に至ったものと推定され、その際に庭園遺構が築造または大規模に整備されたことが考えられる。この時期の館の整備については、元亀年間あるいは天正初年頃に館の「土井廻塀之儀」を命じる文書が大友氏によって発給されていることが指摘されており、考古学的な調査所見と一致していることが注目される。これに対応する町屋の画期については今のところ不明であるものの、最も遺構が濃密な時期である。

さらに、これまでに調査された、館及び町屋のほとんどの地点で出土している東南アジア産陶磁器や他地域では稀な華南三彩陶器の存在も注目される。これらはいずれも16世紀後半～末に比定される遺構からの出土であり、この時期最も盛んに貿易活動が行われ、それに伴って町屋が繁栄したことが推定できよう。

1586年の島津軍の侵攻による荒廃は各調査地点で認められるが、その後の復興については町屋においてはこれまでのところ全く確認できていないのに対し、館では一部再整備が想定される事象が認められる。しかしながら、館の庭園遺構については再建されていないことから、再整備の規模ならびにその目的については今後の検討を要する。

参考・引用文献

- 大分市史編纂委員会 1987『大分市史 中』大分市
大分市史編纂委員会 1987「戦国時代の府内復元想定図」『大分市史 中巻付図Ⅱ』大分市
木村幾多郎 1993「研究ノート 府内古図の成立」『大分市歴史資料館年報 1993年度』
大分市歴史資料館
木村幾多郎 1996「高国府・勝津留考」『Funai 府内及び大友氏関係遺跡調査研究年報V』大分市歴史資料館
玉永 光洋 1997「豊後府内の形成と寺院」『中世都市研究 4 都市と宗教』中世都市研究会
高畠 豊 1997「中世大友城下町跡第1・2次調査」
『大分市埋蔵文化財調査年報 Vol.8 1996年度』大分市教育委員会
高畠 豊 1998「中世大友城下町跡第3次調査」
『大分市埋蔵文化財調査年報 Vol.9 1997年度』大分市教育委員会
高畠 豊・河野 史郎・塙地 潤一 1999「中世府内の館と町—最近の調査事例を中心として—」
『大分県地方史 第174号』大分県地方史研究会
塙地 潤一 1999「九州出土の京都系土師器Ⅲ」『中近世土器の基礎研究』 XIV日本中世土器研究会
鹿毛 敏夫 1999「戦国に都市をつくる」
『府内と臼杵から戦国の世界が見える～都市・貿易・民衆～』大分県立先哲資料館

